分担研究
□川崎病心血管後遺症の追跡，管理に関する研究

加藤裕久

川崎病心血管後遺症研究班は調査研究として①「川崎病心病変の管理に関するアンケート調査 ― 日米の比較」，②「川崎病におけるガンマ・グロブリン療法 ― 全国アンケート調査」をおこなってきたが，昭和６３年度の調査研究として ③「成人領域における川崎病心血管後遺症の実態調査」を計画した。個別研究としては従来通り，「心血管病変の病態，管理に関する研究」，「血栓の病態，診断及び治療に関する研究」「心血管病変の病理学的検討」「外科的治療に関する研究」に関しての研究がおこなわれた。

1. 調査研究：成人領域における川崎病心血管後遺症の実態調査

川崎博士によるこの疾患の最初の報告から２０数年たち，初期の例はすでに成人に達している。またさらにこれらの例は心血管障害に関して十分な検索が行なわれていないものが多く，心臓後遺症を持ちながら成人に達しているものも少なからず存在するものと考えられる。そこで現時点における実態を調査し，今後このような症例に遭遇する可能性のある内科循環器医にもこの問題の重要性を認識してもらうことが必要となってきた。

調査方法は全国の主な循環器病診療施設（内科，外科）354施設に調査表を送り，33施設より48例の成人の川崎病が原因と思われる虚血性心疾患の報告を受けた。さらに調査用紙を送り，21例につき詳しい臨床データの分析をおこなった。それによれば川崎病発症から心症状発現までの期間は10年から20年が多く，3例に突然死がみられ，あとの例は心筋梗塞，狭心症などの虚血性心疾患として内科を訪れていた。ＡＣバイパスを受けた例が9例みられた。最長年齢は63才で，川崎病の最初の報告以前よりこの疾患が存在していたことが示される。また成人の虚血性心疾患のなかに川崎病後遺症がまぎれこんでいることも示された。

2. 個別研究

上記の成人における川崎病心後遺症調査研究と同様の観点から「内科領域における川崎病後遺症の臨床病理学的検討」が藤原氏（京都大学内科）より報告され，前に述べたと同様に今後，後遺症が内科領域でも問題になることが示された。

学童心臓検診においてもこの問題は重要であるが，保崎氏（東京医科歯科大）から東京地区における小学生の川崎病既往児は0.34％から1.02％で川崎病多発年度に乳児期であった学年に頻度が高いことが示された。心筋の変化が長期的に後遺症としてどのような問題になるかはまだ不明の点が多い。心筋生検組織と左室駆出率の関係について馬場氏（倉敷中央病院）より報告され，冠動脈障害が強いほど心筋の変化が強く残り，また左室駆出率の低下もみられたことより，心筋の変化が虚血性の因子によることが示された。

久留米大学小児科

冠状動脈瘤のregression（消退）に関し加藤氏（久留米大学）は多数例の長期follow-up studyよりこの現象が川崎病血管炎の特異的なものであり，動脈瘤の約60％に消退が起こり，発症より2年以内に起こりやすく，一旦消退した例からは血管造影で狭窄性病変へと進行したものはなく，臨床的にも虚血の所見を呈した例はみられなかったと述べている。ただ動脈硬化への進展に関してはrisk因子となりうることを指摘した。この問題に関連し，直江氏（東邦大病理）は急性期以後に死亡した28例の剖検例を検討した。川崎病血管炎の長期経過例で内膜の肥厚がみられることが以前より指摘されているが，modified smooth muscle cell（M-SMC）が3年以内に線維性内膜肥厚に移行するが，泡沫細胞の出現はみられず，川崎病血管炎が動脈硬化へと進展するか否かはもっと長期的な観察が必要であると述べている。

外科的治療に関しては，北村氏（奈良県立医大外科）より内胸動脈グラフトの有用性につき心機能の面より検討された。また遠藤氏（東京女子医大外科）は16年間における15例の手術経験から川崎病の自然歴で死亡が最も多くみられる3～4才以下における手術は，外科成績の向上にもかかわらず，いまだ問題を多く残しており治療法の確立が急務であることを指摘した。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

川崎病心血管後遺症研究班は調査研究として①「川崎病心病変の管理に関するアンケート調査一日米の比較」・②「川崎病におけるガンマ・グロブリン療法一全国アンケート調査」をおこなってきたが,昭和63年度の調査研究として③「成人領域における川崎病心血管後遺症の実態調査」を計画した。個別研究としては従来通り,「心血管病変の病態,管理に関する研究」,「血栓の病態,診断及び治療に関する研究」「心血管病変の病理学的検討」「外科的治療に関する研究」に関しての研究がおこなわれた。